

続・ 珈琲の思い出十七

「和樹さんの会社はここから近いんですか？」

「はい、僕はE町のW商事です。」

「いつもこれぐらいの時間にお仕事は終わるんですか？」

「いえ、日によって違いますが、今日はとにかく優子さんに新聞のことを言わなくては、
と書いて……。優子さんはお仕事はいつも今日ぐらいの時間までですか？」

「まあ、嬉しい、ええ、私は大体18時までが多いですね。忙しいときは閉店の21時までになりませんが。」

はじめてまともにお互いが口を聞いたこの瞬間が、永遠のものになればいいと、二人とも感じていた。もつと、もつと相手のことを知りたい、夢にまで見た憧れの人が目の前に座っているのだ。

和樹は優子の目がキラキラと輝いているのに思わず見とれていた。優子は、コーヒーカップを握る和樹の指が意外にも太くがっしりしていることになぜかときめきを感じていた。

どうしよう……もう帰らなければ子供たちが心配しているだろう。子供たちを預かってもらっている母にも、今日は遅くなる、という連絡は入れていないし……。でも、でも、もつと和樹と話していたい。一緒にいたい。

「あの……、和樹さん、ごめんなさい。私、そろそろ帰らなくてはならないんです。子供たちが待っているのです。」

そう言った瞬間、和樹の体が椅子に沈み込んでしまい、ガッカリしているのが見てわかるほどだった。

そこで優子は勇気をふりしぼって、和樹に尋ねた。

「あ、あの、今日は本当にありがとうございました。」

そ、それで、もし良かったら、和樹さんの携帯のアドレスを教えてくださいませんか？」

(続)

鈴木優子